0911 Exam 519712122057261
Series 1 Image 1 [1]
0.0mm

(財)日産厚生会 玉川病院
16-7568-1
M 07bY
JP2

R

毛髪検査院展

		27		
		31		
		225		
		21		
		15		
		230		
		183		
		6.2		
		13.7		
Na			13	
Cl			99-108	
K	12		3.4-5.0	
Ca	12		8.4-10.4	
IP		IP	成:2.5~4.5 小:4.5~6.5	反応
Fe	12	Fe	54~200	
TIBC-色	20		48~154	潜血
			M:253~365 F:246	
BC-出色	20	UIBC	M:104~259 F:108~325 μg/dl	赤血
糖	12	血糖 :	119 / 70~110 mg/dl	白血
1c	60	A1c	5.5 / 4.3~5.8 %	尿
	19	CRP	0.1 / (−) 0.4未満 mg/dl	沈
	20		(−)	
	20	RF	20以下 IU/ml	渣
			210以下 IU/ml	

7年11月19日 実施料 220点 ID 20798
検査責任者 安藤 辰雄 昭和メディカル

手指骨－高
20121220/154727

195%
4096/2047
可逆圧縮

病の神様の微笑

イナバ トシロウ
稲葉俊郎
東京大学医学部附属病院循環器内科助教

健康学と病気学

横尾忠則の絵画やデザインは、自分にとっての医師であり医療である。なぜなら、横尾忠則の絵を見ると元気になるからだ。自分の中にある「力」が呼びさまされ、小動物のようなものがワサワサと動き始め、夜の森に風が吹くようにザワザワとざわめきだす。自分の奥深い場所にある「いのち」が活性化しはじめるのだ。

現代医療は「病気学」とでもいうもので、基本的に「病気」を敵と見立てて闘うものだ（「闘病」）。ただ、自分が医療の現場で働いていて、「病気学」だけではなく「健康学」とでも呼ぶべき、「健康」に関する智慧をこそ求めているのではないかと思う。横尾忠則は数多くの「病」を経験しているが、闘っているようには見えない。むしろ、戯れるように共存しながら、深い意味を読み取る智慧に長けている。「病」を「健康」へ至るきっかけとする心身との付き合い方は、横尾忠則流の「健康学」だ。自分も医師という立場を越えて、ひとりの人間としていつも学ばせてもらっている。

> 「病気は自己超克のためには大きいチャンスになるかもしれない。魂はいつも本人に信号を送っているのになかなか気づいてくれない時には、最終手段として病気にさせて気づかせようとするようだ」
> 「これからは病気を赤信号ととらえないで、緑信号に変えるための合図だと思うようにすれば病気もまた愉しいということにならないだろうか」
>
> （横尾忠則『人工庭園』「病気は自己超克の機会」）

> 「病気と人間の心は、われわれの感知できないレベルで常に交流、交感しあっているのかもしれない。だとすれば感謝という気持ちを持つ必要がある、ということをぼくはこの体験から気づかされたのであった。」
>
> （横尾忠則『病の神様』「無意識のパフォーマンス」）

病の意味

人はなぜ病をおそれるのだろうか？

それは当たり前の日常が壊れることの恐怖や、病の背後にある死の影を無意識に感じて、心が勝手に反応するからだろう。

そして、「あたま」が見ている現実が、「からだ」や「こころ」の現実、そして「たましい」や「いのち」、「自然」や「宇宙」の現実と食い違っているのを感じ、そのズレに対して「あたま」はおそれを感じているのだろう。こうしたことは「あたま」の自動的な反応でもあるから仕方ないことだ。人間はこうした体を授けられて生きていくように定められているのだから。ただ、「病」には病自体の理（ことわり）があり、それは生命の理に従ったプロセスでもある。

横尾忠則は「病」を日常的に通過しながら、芸術の神々とも戯れている人物だ。「病の神様」という著作もあるように、病の働きを通して、その向こう側にカミサマの働きをも見る眼差しを忘れていない。

なぜ横尾忠則に「病」が必要なのか。その関係性を生んだ背後には何が広がっているのだろうか。

異界

この世の理屈を超えた、まったく異なった理（ことわり）を持つ世界を「異界」と呼ぶ。

人は、苦しい時こそ、超越的な「異界」へのまなざしが開かれやすい。

「病」という体や心が生んだ状況も同様だ。人は死の影を見ると、強烈に生命の力が働き、眠っていた何かが目を覚ます。自分に起きた病という現象から目をそらさずにしっかりと見ていくと、病を生んでいる母体としての体へと視点は広がる。体の母体にはいのちがあり、いのちの母体には森羅万象がある。人によっては森羅万象を生んだ超越的な世界への眼差しも開かれるだろう。感情の深みを生きている人は、自身の身体を入り口として万物の深みへと心の目が開かれるきっかけになる。

「異界」の論理は、この世の常識では太刀打ちできない強さがあるため、一歩間違うと危険なものにもなりえる。異界の「力」は魂を救う力となることもあれば、現実を破壊する力にもなる。芸術はこうした「異界」への門を開けて橋渡しをする役割がある。アートはゲートとなる。ただ、アーティストは生身の肉体をもった人間なので、その代償として身体に「傷」を負う場合がある。真のアーティストは、そうして命がけの行為を運命づけられている存在だ。横尾忠則にとって、日々の創造行為は遊びであると同時に仕事であり、同時に儀式や神事でもある。「異界」へ通じる

ゲートは、遊び、仕事、儀式が円環構造でつながっていて、どこからでもアクセスできる。果たして、あなたにとっての遊び、仕事、儀式はバラバラにならずつながっているだろうか?

異界のような世界でこの世ならない体験をして、この世界へと戻ってくる。それは失われた「力」を取り戻す魂の体験とでもいうべきものだ。物語にもそうした内容のものが多い。魂の領域は、肉体の領域に接近しているから、肉体が壊れてしまう危険性もある。異界の混沌（カオス）を受け入れる苦しみに耐えることができたとき、この世界と異界とを結び付ける門（ゲート）が作られる。閉じるときは人々を守り、開かれるときは人々に力を与える通路のための門。

異界の力は、異界の一面だけを極端な形で示した霊能力などの、ある意味では分かりやすい力への関心に走りやすいが、それは一面でしかない。アーティストはキャンバスの中にそうした異界の力をダイレクトに映し出す。それはイメージを介した「力」そのものだからこそ、ただその絵を見るだけで幸せな気持ちになったり、畏怖を伴う感情が沸き起こったり、時には名前のつかない不可思議な感情が自分の中をかけめぐる。そして、わたしたちの深い無意識を活性化させることで、わたしたち自身の身心も更新されるのだ。体や心を深くから支えている、人間の魂や命と呼ぶべき領域へとダイレクトに働きかけ、わたしたちの命をよびさます。

アーティストは、こちら側の世界に踏ん張りながら、生身の肉体のままで異界とこの世界とをつなげようとする。そのための通路や門をつくるために、アーティストは自身の全存在をかけて温かい血を流す。流された温かい血は、こちらの世界の歪みをひとつひとつ補正し、関係性を結びなおし、この世界全体の精妙な均衡を取り戻す力となる。横尾忠則が全霊をかけて絵に取り組んでいるからこそ、彼の体は見えない血を流している。病は、そうしたことからも派生する。

思春期

わたしたちは誰もが子供から大人になる。その移行期である思春期に、「自分もいつか死ぬのだ」という「死の概念」と最初に出会う。つまり、死の視点から生を見る不安定な時期でもある。「死」という謎（であり真実）を一身に引き受けるこの時期には、色々な形で死のイメージがつきまとう。そもそも、子供から大人になるという変遷自体が、子ども時代の何かが死んで、新しく生まれ変わる体験でもある。

死のイメージ体験は、この世の常識を超えた異界体験とも言えるものだ。死に飲み込まれず、死と切れてしまうのではなく、きちんとつながる。死とつながることで、わたしたちはリアルな生を生きることができる。思春期とは、そうした時期を儀式のように通過する時期だ。そのことで、幸福な日常の生のなかにも死を感じ続けることができる強さを育んでいく。日常と異界とは対立するものではない。生と死も対立概念ではない。位相が違うだけで常に同時存在しているものだ。なぜなら、命は生と死（創造と破壊）という相反する方向のエネルギーで互いに引っ張られていて、両極で強く引っ張られる緊張により命はエネルギーを生み出しているのだから。

そうした生と死を含む生命の全体的力を、横尾作品からは常に感じる。横尾忠則が『文学界』で連載している「原郷の森」の中でも、20歳以降の人生は付け足しのようなもので「自分」のすべての源泉は20歳までの時期にある、と書かれている。誰もが子どもや思春期の時に、一対一でこの世界やこの宇宙と対峙した。その時の感性を奮い立たせるように。わたしたちの「原郷の森」の中にこそ自身の死角が潜み、その死角にはきっと宝物が眠っている。

死の神話

古代に語られた神話は、自分の心のなかに起こることと外に起こることとが分け隔てなく融合して、ひとつの話になっている。昔の人はそれを区別せずに語っていた。

「自分」という存在がこの世界と切れて存在しているように感じられるのは、わたしたちが「あたま」を持ち、意識を生み、意識と無意識との間に高い壁をつくってしまったことに起因する。自分が作り出した「壁」をどうすべきかと考え記したのが神話でもある。横尾忠則は、そうした意味で現代の神話だ。意識と無意識とが分離しない「原郷の森」の神話的イメージ。

無意識から意識が分離していく「自立」は、外的には両親からの自立でもある。この原初の風景を大切に覚えているからこそ、横尾忠則は「原郷の森」へと深く分け入り、自分のイメージの源泉から井戸を汲む冒険に出る。子どもの時の病の経験も、「原郷の森」の風景の一つである。こどものときの病は、一歩間違えると死に至るほど、病は生だけではなく死のイメージとも強く結びついたものだから。自立が孤立にならないように、一度切り捨てた無意識との関係を自身の力で回復しなくてはならない。

現代は、その場を取り繕い、表面的な流れが整うことだけを重視する浅い物語に覆われている。そのこと自体が、この世界の悪意をせっせと育んでいる。だからこそ、横尾忠則は異界も含めたこの現実の多層性を、一身に引き受けて画面に定着させて白日の下にさらす。それは命がけで世界の歪みを戻すような行為であり、身体への多大な負担を伴うものだ。横尾忠則の病の歴史は、これまで通ってきた険しい道のりを間接的に示しているのだと思う。

わたしたちは自由、平等、博愛など、この世に生きるための神話は豊富にあるが、死についての神話は貧しい。人生において（特に人生の後半において）、死についての神話（「わたしたちは死んだらどうなるのだろう」）を見出す努力にも励む必要があるのではないだろうか。つまり、死がわたしたちの人生観にどう取り込まれているか。生と死とに統合的な意味を読み取ろうとすること。そうした大切なことを横尾忠則の絵はわたしたちの無意識へと働きかけている。

心がひとつの層だけで作られていると、ひとつがダメになってしまうとすべてが崩壊してしまう脆さがある。だからこそ、わたしたちは心の深みや多様性を創り出す努力をしながら、心の単層性ではなく多層性を発見し、世界の多層性も見出していく必要がある。

無意識のエネルギー

無意識からのメッセージをいかに創造的な生き方へと発展させていくかに、治療の根本はある。体はまさに無意識の海そのものだ。そのためには、無意識の中に闇だけではなく光も見る。無意識の破壊的な側面だけではなく、創造的な側面も見る。

電車を見ても現代人は驚かない。なぜなら、「不思議」や「謎」がなければ、心には摩擦が生まれないからだ。ただ、もし電車事故を目撃したらどうだろうか。心の中におさまりにくいのを感じる。何が起きたのだろう、と、心の中にはわだかまりができる。その出来事をなんとか心の中に収めようとするが、見なかったふりをしたり、忘れようと意識したりして、意識の上から消え去ったように見えても、無意識下では心の中におさめようとせっせと仕事をし続けている。

ただ、イメージを媒介として、無意識内に貯留されているエネルギーが意識内へと伝えられてくることがある。横尾忠則の絵画は無意識を活性化する力に溢れていて、ただ絵を見ているだけで、わたしたちが心に収めきれなかった体験が別の形で収まっていくのを感じる。自分はこうした横尾作品の働きに、医療的な力を感じている。無意識の力が、創造的な生き方へと発展していく。

横尾忠則が電車事故のニュースを見た後に呼吸困難になった時のエピソードが興味深いので紹介したい。

> 「その時突然、病室にいる医師や看護師、救急隊の人々、妻、ぼくのアシスタントが心配そうに見守っている診察室の光景に重なるように、巨大な青い地球の一部がビジョンになって映し出された。まるで宇宙船からクローズアップされた地球を見ているような感じである。そして次に見えたのは、地球の各地で起こっている紛争だ。不思議なことにその場所がパッパッと電気がつくように分かってしまうのである。これは夢なのか、それとも幻想なのだろうか。
> そして次に起こったことは、ぼくの眼から大量の涙が流れ落ち始めたことだ。看護婦さんがハンカチで拭いても拭いても涙が眼から溢れ出るのだった。そしてピカピカと光っている地球の紛争地帯を見て、わけもなく悲しくなるのだった。悲しくなるといってもぼく自身がそんな気持ちになるのではなく、ぼくの眼を通して地球を見つめている「何者か」の慈愛に満ちた感情なのだ。まるでぼくの中にソッと入り込んだマリア様のような「何者か」の慈愛に満ちた感情なのだ。」
>
> （横尾忠則『病の神様』「突然の呼吸困難」）

「心に収まりにくい」体験を経た時、無意識は常に身体の問題として素直に表現されて表に顔を出してくる。意識と無意識とを分離せずに全体的な一つとして生きているからだろう。自分自身に嘘をつかず、意識と無意識が常に交じり合っているからこそ、こうしたことが日常的に起きるのだ。そして、この後のエピソードも面白い。

> 「この話を瀬戸内寂聴さんにしたら、彼女は、「岡本かの子もあなたと同じで、自分は悲しくもないのにただただ涙が溢れて泣けるんだって。これは一種の宗教体験で『代受苦』といって、誰かに代わって泣くらしいよ」と言われた。
> 「へぇー」とぼくは感心しながら聞いていたけれども、一方では信じる気になれなかった。なんでもかんでも宗教体験や神秘主義にしてしまうと、現実そのものを虚構に変えてしまい、まともな生活ができなくなってしまう。」
>
> （横尾忠則『病の神様』「突然の呼吸困難」）

「内界」や「外界」だけでなく「異界」に対しても開かれているからこそ、自身が磁場のようになり、あらゆるものが絵画の中に引き寄せられて登場してくる。ただ、それでいて「病」を引き受ける素直な肉体に忠実に生きているからこそ、常に現実主義者としての地に足がついた視点も大切にしている。現実の受け止め方が、病とのいい付き合い方にもつながっている。

日常という謎

日々起きる当たり前のことを「謎」として受け止めることができた人が、時には万有引力を発見し、時には地球が回転していることを発見した。生きて死ぬという当たり前のことを「謎」として受け止めた人が、例えば仏教を生んだ。この世界は、実は「謎」に満ちているのだが、心が安定しないことを恐れ、見て見ないふりをして過ごしている。恐れは根深い感情であり、もし「謎」を発見してしまったら自分で探求する責任が生まれてしまうからだ。

なぜわたしは存在しているのか、「わたし」とは何なのか、そうした根本的な「謎」に応える試みは、横尾忠則の芸術となった。少年時代に体験した謎は絵画となり、画家転向の内的変化の謎は絵画となり、顔面神経麻痺の前触れの謎は絵画となり、愛する猫の死の謎は絵画となり、外的な竜巻の発生が内的な突発性難聴へとつながった謎は絵画となった。わたしたちが当たり前として見過ごしている「謎」を発見して形にできる人が、アーティストと呼ばれるのである。

心身に起きる病を、当たり前としてではなく「謎」として受け止める感性がありさえすれば、病の神様はにっこりと微笑んでくれるだろう。